

林外務大臣の 2023 年初のラテンアメリカ歴訪

小林 麻紀（外務省 中南米局長）

2023 年の外交の幕開けはラテンアメリカ（中南米）から

2023 年、日本は G7 議長国を務め、明年にかけて国連安保理非常任理事国を務める。非常任理事国就任直後の 1 月に日本は安保理議長国を務めることとなり、林芳正外務大臣は 1 月 12 日に法の支配に関する安保理閣僚級会合を国連本部にて主催、それに先立つ 1 月 4 日から 11 日までの 8 日間、メキシコ、エクアドル、ブラジル及びアルゼンチンの中南米 4 か国 5 都市（各首都およびブラジル・サンパウロ市）を訪問した。

林大臣は就任以来、国際会議の機会を含めた対面やオンラインで多くの中南米諸国外相と会談してきたが、共に非常任理事国を務めるブラジルとエクアドル、G20 メンバーであるメキシコ、ブラジル、アルゼンチンの首脳、外相、経済相等と、この重要な年の始めに意見交換することとした。現地で活躍する日本企業や日系人の方々から課題や日本政府への期待について懇談する機会も得た。

訪問の目的と主な成果

ロシアのウクライナ侵略は、政治・経済両面での中南米の位置づけを高めた。

中南米の大部分の国はロシアによる武力行使、領土一体性への侵害をいち早く非難した。食料、エネルギー、重要鉱物資源を巡るサプライチェーンの分断リスクが増す中、多くの資源を供給し、地域情勢も安定している中南米への貿易・投資も増している。

国際社会が歴史の転換点に立っている今、直面する問題の認識、解決の方策、今後の国際社会のあり方について、より多くの国と、より多くの点での合意を広げていかねばならない。中南米の多くは、いわゆるグローバルサウスの中でも我が国を始めとする G7 諸国等と基本的価値を共有し、立ち位置が近

い。主要国は国連安保理決議がない中での制裁には参加しない方針を有しており、また多くの国は戦闘が長引く中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）で傷んだ経済が更に影響を受ける現実にも直面している。情勢認識や国際社会が直面する危機の解決に向けた考えを擦り合わせ、世界の平和と繁栄、それを支える国際秩序の強化を追求していく道筋を作っていくために、緊密に対話していくべき重要なパートナーである。

訪問の狙いは主に 3 点。上述の認識の下、第一に、地域・国際情勢につき意見交換し、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の維持・強化、そのための国連機能の強化を含む重要な国際課題への対応における連携を確認すること、第二に、良好な二国間関係を支える双方の経済関係・協力関係の促進、信頼関係を盤石なものとしていくためのハイレベルでの強固な関係作りを行うこと、特に 1 月 1 日に発足したブラジルのルーラ政権は南南協力や気候変動対策を重視し、バランスをとりながら国際社会に貢献する外交姿勢を示しているところ、発足直後から関係を築くこと、第三に、中南米各国の親日感情の礎を築いてきた世界最多の約 230 万人の中南米日系社会と世代を越えて連携強化を図ることであった。以下のとおり、それぞれの地でじっくりと意見交換し、外相同士の個人的親交も深め、所期の目的を達成できた。

（1）メキシコ

エブラル外相は、JICA（国際協力機構）研修のため訪日した経験があり、メキシコ市長時代から、日本が主催してきた科学技術と人類の未来に関する STS フォーラムに幾度も参加してきている親日家である。（電話会談含め）3 度目となる今回の会談でも打

ち解けた雰囲気の下、ウクライナ情勢、東アジア情勢、国際場裡における連携協力を含め広く議論した。

二国間関係については、本年は日メキシコ外交関係樹立 135 周年にあたり、これまでに双方計約 4800 人の研修生を輩出してきた「日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画」50 周年にもあたることを踏まえ、一層の人的交流、学術交流、科学技術協力等を通じて強化していくことに一致した。また、最近のエネルギー政策等を踏まえ、林外務大臣から、日系企業が中長期的視点から投資を行う上で、法的安定性や予見可能性が重要となる点を指摘し、ビジネス環境整備の配慮を要請したところ、エブラル外相からは、重要なパートナーである日本の関心に留意して対応を検討していきたい旨反応があった。

2022 年 10 月に就任したばかりのブエンロストロ経済大臣は、国税庁長官時代のハードネゴシエーターぶりが評判であったが、終始にこやかに歓談し、日系企業のニーズに応える姿勢を見せていた。ロペス・オブラドール大統領の関心事項である南部地域開発を重視しつつ、near-shoring friend-shoring によりメキシコへの投資が拡大している機会をしっかりと掴もうとする意思も感じられた。CPTPP（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）について、協定のハイスタンダードを維持するべく、両国が緊密に連携していく旨一致した。

(2) エクアドル

日本の自動車関連企業に勤めた経験もあるラッソ大統領は、90 年代に年に 2 回訪日した際の思い出にも触れた上で、予定を大幅に超える約 1 時間にわたり林大臣と意見交換を行った。オルギン外務大臣、

アロセメナ経済大臣、ブラド貿易大臣が同席し、ラッソ政権が重視する国際協調及び自由主義的な経済政策、環境政策、国際社会が直面する諸課題や二国間の貿易投資関係等、協力強化について幅広く意見交換した。

オルギン外相とはオンラインでは会談していたが、初めて対面し、更にワーキングランチにて、経済大臣、貿易大臣も参加し、活発なやりとりを行った。ラッソ政権は、自由貿易を標榜し、FTA 網を拡大すべく太平洋同盟に参加するために交渉し、中国とも 10 か月で FTA 交渉を終え、昨年末に CPTPP 加盟申請もしており、日本とも EPA や CPTPP を通じた貿易投資関係を強化したいとの強い意欲が示された。また、オルギン大臣からは、日本の「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」の取組に対する明確な支持があったほか、日本による対エクアドル支援への謝意が表明された。両大臣は、多種多様な生態系を誇るエクアドルとの間で、海洋環境保全や IUU（違法・無報告・無規制）漁業対策での協力についても確認し、ウクライナ情勢や東アジア情勢、安保理改革を含む国連の機能強化に向けても緊密な連携を図ることで一致した。オルギン大臣は、冒頭に触れた 1 月 12 日の法の支配に関する安保理閣僚級公開討論にも出席され、再び林大臣と顔を合わせた。本年から 2 年間、共に安保理非常任理事国を務める両国外相が、緊密な信頼協力関係を構築できたことは意義深いことであった。

(3) ブラジル

本年 1 月 1 日に発足したルーラ政権といち早く関係構築をすることは、今次中南米訪問の重要な目的であった。大臣一行がブラジリアに到着する数時間



写真 1：メキシコ外相との会談（写真は全て外務省提供）



写真 2：エクアドル外相との会談

前から、新政権に対する大規模な抗議行動が一部暴徒化して三権の建物に乱入・破壊する事件が起きた。報道映像を見てどうなることやらと心配していたが、事態は速やかに鎮圧され、翌日は予定どおり、新政権発足後の最初の賓客として迎えられた。ヴィエイラ外務大臣と少人数で意見交換した後、多くの外務省幹部が参加する拡大会合に続きワーキングランチと約3時間を共に過ごし、両国の幅広い関心事項、地域情勢、国際場裡における協力につき意見を交わした。両大臣は、食料・エネルギー・鉱物資源等に係る協力やハイレベル交流の活性化について一致するとともに、両国が安保理非常任理事国を務める本年、日本が重視する法の支配の促進での取組や、安保理改革を推進するG4（日独印伯）のメンバーとして、安保理の内外で連携していくこと等を確認した。さらに、新政権が重視する包摂的成長に向けた経済関係の強化やアマゾンの森林資源の保護や気候変動分野での連携促進についても意見交換した。両大臣は、昼食会の前後にブラジル外務省の賓客接遇スペースの美術品なども鑑賞しながら歓談し、今後に向け、非常に良い関係が構築された。

三権施設の破壊行動を受け、林大臣からブラジル新政権やブラジル国民に対して直に、暴力によって民主主義を脅かす行為は許されるべきではない旨述べつつ、民主的に選出されたルーラ大統領と新政権への支持を改めて表明することはできたが、残念ながら矢継ぎ早に各州知事や治安当局と会合をしていたルーラ大統領との会合は持てなかった。

ブラジルでは、ブラジル外務省のリオブランコ外交官研修所において、「Expanding “Networks of Solidarity”（『連帯の輪』）を広げる—中南米と共に歩

む日本外交—」と題する講演を行った。同講演において、林外務大臣は、中南米諸国と共に、平和で繁栄する世界の再構築に向け、①安保理改革や国連全体の機能強化のため、法の支配で繋がる連帯の輪、②気候変動対策、WTO（世界貿易機関）改革やIUU漁業対策を始めとする共通の諸課題解決に向けて地球を守る連帯の輪、③持続的な経済成長と格差是正を目指すべく共に成長する連帯の輪を広げ、一層連携していくことを呼びかけた。同講演には、サボイア外務副次官（前駐日ブラジル大使）を始めとするブラジル外務省幹部や、米国、EU、パルー、インドネシア等多数の駐在大使及び議員も出席し、若手外交官からの、グローバル・サプライチェーンの強靱化に向けた連携、脱炭素化に向けた日・ブラジル合同のイニシアティブ、日系人を含む両国の人的交流の一層の深化等の質問を受けたやりとりも行われた。

（4）アルゼンチン

サッカーワールドカップ優勝の余韻も覚めやらぬアルゼンチンでは、林大臣から日本のファンも感動したことを祝意とともに伝達しながらフェルナンデス大統領への表敬を始めたが、こちらも予定を大幅に超え約1時間、貿易、投資、科学技術を含む二国間関係の強化に加え、地域情勢についても忌憚ない意見交換をし、国際場裡における連携を確認した。

林大臣とカフィエロ外務大臣とは、オンライン会議のみならずG20でも対面で会合をできていたが、アルゼンチンの独立を指揮したサン・マルティン將軍像への献花をした後にはカフィエロ大臣の車に同乗して歓談し、大統領表敬にも同席、外相会談及びワーキングランチも行い多くの時間を過ごした。これ



写真3：ブラジル外相との会談



写真4：アルゼンチン外相との会談

までの対話の積み重ねも踏まえつつ、本年、外交関係樹立 125 周年を迎える両国関係を一層強化していくこと、経済関係強化のためにも進出企業の直面する課題に耳を傾けて投資環境を整備することが重要であること等を確認し、軍縮・不拡散、人権等の諸分野における協力、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の実現に向けた協力についても確認した。

さらにマサ経済大臣とも会合し、各種規制等の投資環境について改善の要望を伝達し協力を確認するとともに、マサ大臣からは、埋蔵量が世界的に多いリチウムや天然ガスの開発が進むことにより経済が今後上向きに転じていく方向であることを強調しつつ、日系企業の投資増加による両国経済関係強化への期待が表明された。

(5) 日系社会との懇談

林外務大臣は、メキシコでは日墨会館を視察した他、現地で活躍する若手日系人や親日家とも懇談し、ブラジル・サンパウロでは開拓先没者の慰霊碑に献花し日本館を訪れた上で、日系社会歓迎式典に参加し、アルゼンチンでは日系人の代表の方々と懇談する機会を持った。大臣は、日本への信頼が日系人の方々の培った信頼の上に成り立っていることにも触れつつ、各地のコミュニティーへの貢献を含めたこれまでの日系人の方々の尽力に敬意を表した。参加者からは、林外務大臣の訪問により二国間関係が強化されること、日系社会を訪問されたことに大いなる歓迎が表され、日本文化の発信、日本語教育の重要性やビジネスを通じた関係強化等、今後の日系人社会との連携のあり方について活発に意見が出された。

サンパウロの歓迎式典では、大臣から、外務省内に新たに設置した「中南米日系社会連携推進室」を通じて取組を強化していく方針を示し、若い世代を含む日系社会のネットワーク作りを支援していく意向を表明した。また中南米の日系人の農協、医療団体等を支援するために 6.4 億円の資金援助を行うことを決定した旨も伝達した。

対中南米外交の今後

年初の大臣の歴訪で、今年の中南米外交は良いスタートを切ることができた。

中国や韓国も貿易投資や経済協力を高め、またサプライチェーン強靱化等の観点から欧州はじめ多くの国がアプローチを高めてきている。このスタート

を活かし、疲弊した経済の建て直しや喫緊の課題に協力し、共に国際社会の秩序を建て直すために中南米諸国の問題意識に耳を傾け、ハイレベルでの対話を継続し、一段上の緊密な連携協力関係に押し上げていかねばならない。

本年は日ペルー交流 150 周年でもあり、来年は日カリブ交流年（ジャマイカやトリニダード・トバゴとの外交関係樹立 60 周年）であり、ブラジルが G20 議長国でペルーが APEC（アジア太平洋経済協力）議長国を務め、2025 年は大阪万博があり、中米諸国とは外交関係樹立 90 周年となる。こうした機会も活用し、要人往来や日系人を含む親日家・知日家に支えられた重層的で恒常的な意思疎通を活性化し、対中南米との強力な連帯の輪を広げていきたい。

（本稿は、執筆者個人の見解に基づくものであり、外務省の見解を代表するものではない。）

（こばやし まき 外務省 中南米局長）

